「新勅撰和歌集」の「詞書」の語彙について

若林俊英

一

本稿は、第九勅撰集である「新勅撰和歌集」の詞書・左注（以下、「新勅撰詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、その使用実態をいささかまとめたものである。

「新勅撰和歌集」は、後堀河天皇の勅命により藤原定家が撰進したものであるが、途中で院の崩御などもあり、複雑な過程をたどって成立したものである。内容的には、

道家ら九条家、公経・実氏ら西園寺家の貴顕や、実朝ら幕府関係者、定家と私交のあった者などの歌を多く収め、集の定家的性格は顕著である[1]

とされるものであるが、撰歌の定家的性格は、当然、詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）にも存すると思われる。このような点から本稿では、主として、定家の父である藤原俊成撰の「千載和歌集」、定家が撰者の一人として加わった「新古今和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「千載詞書」「新古今詞書」と略称する）の自立語語彙の使用実態と比較し、「新勅撰詞書」の自立語語彙の性格をみることにする。

語彙調査をするに当たっての単位語の取り方については、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（以下、『語い表』[2]と略称する。昭和四六年九月、笠間書院）における認定基準に、おおむね依拠した。また、本文は、滝澤貞夫氏編『新勅撰集総索引』（昭和五七年一〇月、明治書院）の底本（冷泉家旧蔵伝為家筆定家自筆識語穂久邇文庫蔵本）によった。なお、使用度数の調査に当たっては、同書を参照させていただいた。また、以下、語数に関しては、特に注記しない場合、異なり語数とする。

二―1

「新勅撰詞書」の異なり語数・延べ語数は、それぞれ一〇五四語、五〇六二語となる。したがって、平均使用度数は四・八〇となる。この数値は、かつて調査した八代集の「詞書」の自立語語彙における同様な数値[3]と比較した場合、「後撰和歌集」「後拾遺和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「後撰詞書」「後拾遺詞書」と略称する）および「千載詞書」「新古今詞書」におけるそれよりも低く、「古今和歌集」「拾遺和歌集」「金葉和歌集」「詞花和歌集」の「詞書」（以下、それぞれ「古今詞書」「拾遺詞書」「金葉詞書」「詞花詞書」と略称する）におけるそれよりも高いものであることがわかる。また、八代集の「詞書」の平均使用度数の単純平均は四・八六となるが、これらからして、「新勅撰詞書」の平均使用度数は、「詞書」の自立語語彙におけるそれとして、きわめて平均的なものであると言える。

2

次に、用語の類似度の点から、「新勅撰詞書」の語彙についてみることにする。

類似度の計算式にはさまざまなものが存する[4]が、ここでは水谷静夫氏が示された類似度D'を使用[5]したい。

表（1）は、「新勅撰詞書」の語彙と、「古今詞書」「千載詞書」「新古今詞書」のそれとの類似度D'についてまとめたものである。この表（1）からは、

1　「千載詞書」と「新古今詞書」の類似度D'

2　「古今詞書」と「新古今詞書」の類似度D'

が注目に値する高さであることがわかる。また、「新古今詞書」と「新勅撰詞書」の類似度も、1ほどではないものの、非常に高いこと[6]がわかる。一方、2に関しては、新しい「古今和歌集」たらんとした「新古今和歌集」の性格上、それらの「詞書」の類似度が高いのは、当然の結果とも言えよう。それに対して、「古今詞書」と「新勅撰詞書」の類似度の低さは、気になるものであるが、その理由は、必ずしも明確ではない。

ところで、佐藤恒雄氏は、「明月記」の記述を手がかりとして、「新勅撰和歌集」編纂時の定家について、

> 新古今時代のまっ只中にあった当時の、自らを中心とする最も典型的な方法と歌風を完全に否定し、尋常のものと考えぬというところまで、定家の思考は変化していることを凝視しなければならない[7]

とされている。このような定家の新古今時代歌に対する姿勢が「詞書」にも影響したのかもしれない。そして、「新勅撰詞書」の語彙は、新しい「古今和歌集」を庶幾した「新古今和歌集」の「詞書」の語彙とは趣を異にしたものとなった結果、「古今詞書」との類似度が低くなったとするのは、うがち過ぎであろうか。

表（1）

	古今	千載	新古今
新勅撰	0.699	0.827	0.851
新古今	0.752	0.861	
千載	0.742		

三―1

次に、「新勅撰詞書」の語彙の語種別、品詞別構成比率の特色についてみることにする。

表（2）は、八代集の「詞書」の語彙に関して、異なり語数・延べ語数における語種別、品詞別構成比率をまとめたものである。また、表（3）は、「新勅撰詞書」の語彙における語種別、品詞別の異なり語数・延べ語数と、それぞれの構成比率をまとめたものである。

表（2）

		語種別比率			品詞別比率						
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	他
古今	異	88.7	10.3	1.0	68.1	24.7	2.7	0.9	2.6	0.5	0.5
	延	91.3	8.4	0.4	60.1	34.4	1.5	0.3	1.5	2.2	0.1
後撰	異	87.9	10.7	1.4	59.3	31.0	4.0	1.9	2.9	0.4	0.5
	延	92.7	6.9	0.5	54.0	37.9	3.3	0.8	2.9	1.0	0.1
拾遺	異	77.2	20.1	2.6	74.0	20.4	2.6	0.9	1.5	0.3	0.4
	延	78.4	20.3	1.4	66.7	29.3	1.8	0.3	1.2	0.7	0.1
後拾遺	異	80.6	17.2	2.2	68.8	28.1	3.6	1.9	2.1	0.4	0.2
	延	88.3	10.9	0.9	58.1	35.9	2.5	0.7	1.8	1.0	0.04
金葉	異	78.3	16.9	4.8	67.1	24.4	3.8	1.3	2.4	0.7	0.3
	延	88.5	9.0	2.5	59.3	36.5	1.8	0.6	1.3	0.4	0.07
詞花	異	78.3	19.3	2.4	66.8	24.8	3.9	1.4	2.1	0.6	0.6
	延	84.4	14.0	1.6	57.8	37.2	2.6	0.4	1.2	0.7	0.2
千載	異	67.7	29.6	2.8	73.4	19.3	3.1	1.0	1.6	0.3	1.3
	延	83.4	14.9	1.7	63.8	32.6	1.6	0.2	1.0	0.6	0.2
新古今	異	70.5	26.7	2.8	71.8	20.3	2.9	1.4	1.6	0.3	1.7
	延	79.5	19.0	1.5	67.3	29.0	1.8	0.4	0.8	0.4	0.3

表（3）

	所属語数	語種別語数			品詞別語数								
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等
異計	1,054	692	329	33	801	189	24	7	14	4	1	1	13
	%	65.7	31.2	3.1	76.0	17.9	2.3	0.7	1.3	0.4	0.1	0.1	1.2
延計	5,062	3802	1193	67	3585	1353	64	10	28	7	1	1	13
	%	75.1	23.6	1.3	70.8	26.7	1.3	0.2	0.6	0.1	0.02	0.02	0.3

表（2）で、八代集の「詞書」における名詞の異なり語数での比率は、「後撰詞書」が最も低く、「拾遺詞書」が最も高いことがわかる。また、延べ語数においては、「後撰詞書」が最も低く、「新古今詞書」が最も高いこともわかる。また、これらの数値と、表（3）に示した「新勅撰詞書」における同様な数値とを比較すると、異なり語数・延べ語数のどちらにおいても「新勅撰詞書」の方が高率であることがわかる。また、『語い表』所載の一四作品の語彙における名詞の比率と比較した場合、異なり語数において最も高率の「大鏡」（六三・九パーセント）、延べ語数において最も高率の「古今和歌集（和歌部分）」「大鏡」（五三・二パーセント）よりも、異なり語数における「後撰詞書」での比率をのぞき、すべての「詞

書」におけるそれらの方が高いことがわかる。なお、「後撰詞書」における名詞の比率が、例外的に『語い表』所載諸作品におけるそれと近似しているのは、「後撰詞書」の物語的性格の反映の結果であると考えられるが、この点については既にふれた。(8)

「新勅撰詞書」における名詞の比率は、この「後撰詞書」とは対極に存するものであり、より「詞書」的性格の強いものであると言える。この点は、「新勅撰詞書」における形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の比率が、異なり語数・延べ語数のいずれにおいても、八代集の「詞書」における形容語の比率の最も低い作品よりも低率であることからしても言えるであろう。(9)(10)

2

次に、語種別構成比率についてふれる。

表（2）および表（3）をみると、「新勅撰詞書」の漢語の比率は、異なり語数・延べ語数のいずれにおいても、八代集の「詞書」における場合よりも高率であることがわかる。これは、いかなる理由によるのであろうか。時代が下るにしたがい漢語の比率が高まるという、一般的傾向にその理由を求めることは容易であるが、果たしてそれだけなのであろうか。以下、時代的にも比較的近い「千載詞書」「新古今詞書」との比較を中心にして考えたい。

「千載詞書」「新古今詞書」「新勅撰詞書」において、単独で使用されている漢語の異なり語数・延べ語数を順に示すと、「千載詞書」においては、一八四、二二四、「新古今詞書」においては、一六五、二四七、「新勅撰詞書」においては、一四八、二四七となる。これらの数値を各「詞書」における全使用語数に対する比率でみると、表（4）のようになる。この表（4）でわかるように、異なり語数における比率は、「千載詞書」「新勅撰詞書」「新古今詞書」の順に高率となるが、延べ語数における比率でみると、「新勅撰詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の順となる。すなわち、「新勅撰詞書」は、異なり語数に比して延べ語数が多い、つまり、「新勅撰詞書」における単独使用漢語には高頻度語が多いことがわかる。この点をよりわかりやすくするために、各「詞書」の単独使用漢語のうち、基幹語彙であるものの数値をあげると、「千載詞書」においては存在せず、「新古今詞書」のおいては、異なり語数三、延べ語数五四、「新勅撰詞書」においては、異なり語数七、延べ語数八四となることがわかる。以上のような点からすると、「新勅撰詞書」における漢語の比率の高さは、漢語の増加という時代的傾向とともに、特に、高頻度の漢語の増加と関係していると言えそうである。

表（4）

	千載	新古今	新勅撰
異なり語数	14.70	11.56	14.04
延べ語数	3.19	3.11	4.88

3

次に、「新勅撰詞書」において単独使用された漢語を具体的にみることにする。

上述の語は、「けんぽう（建保）」「きうあん（久安）」「ごきやうごく（後京極）」「くわんき（寛喜）」「ごほふしやうじ（後法性寺）」「かうしん（庚申）」「にほんしんわう（二品親王）」の七語であるが、この語群において特徴的なのは、年号に関するものが三語、人物に関するものが三語、それぞれ存することであろう。詞書が、「和歌の前にあって、その歌の作歌事情・季節・詠んだ場所などを散文で説明したもの」[11]である以上、年号や人物に関する漢語は頻用されて当然のものであるとも言えるが、以下、その使用が特徴的であると思われるいくつかの語についてふれたい。

年号に関する三語のうち、「けんぽう」「くわんき」の二語は、「新古今和歌集」撰進後の年号であり、「千載詞書」「新古今詞書」に使用され得ないものである。しかし、「きうあん」に関しては、少々、注意が必要であろう。「きうあん」は、「千載和歌集」「新古今和歌集」撰進以前の、平安末期の年号である。したがって、当然、それらの歌集の「詞書」においても使用される可能性を持ったものであるからである。

「新勅撰詞書」における「きうあん」の使用度数は一三であるが、うち一二例は、

例1　久安百首歌たてまつりける時、三月尽歌　（一三六）[12]
例2　久安百首歌たてまつりける秋歌　（三二四）
例3　久安百首歌に、たきもの　（一三五八）

のように「久安百首歌」とするものであり、そのような形をとらないものは、

例4　久安六年、崇徳院に百首歌たてまつりけるとき、はるのうた　（一一）

とする一例にすぎない。

一方、「新古今詞書」における久安百首歌に関する「詞書」では、詠者が崇徳院の場合は、

例5　百首歌の中に　（七一）
例6　百首歌めしける時の春歌　（一三一）
例7　百首歌に、初秋の心を　（二八六）
例8　百首歌めしける時　（六八五）

のように「百首歌に」「百首歌めしける時」のような形で、また、詠者が崇徳院以外の場合は、

例9　崇徳院に百首歌たてまつりける時、春の歌　（一三）
例10　崇徳院に百首歌たてまつりける時　（三四）
例11　崇徳院に百首歌たてまつりけるに　（四一三）
例12　崇徳院御時、百首歌めしけるに　（四三一）

のように「崇徳院に百首歌たてまつりける」に代表される形で、それぞれ統一されており、「新勅撰詞書」におけるような「久安百首歌」という表現を使用しない。ここに「新古今和歌集」の撰者の撰集意識と、「新勅撰和歌集」の撰者定家の撰集意識との差をみてとれるであろう。

次に、「ごほふしやうじ」という用例についてふれたい。

「新勅撰詞書」における「ごほふしやうじ」の使用度数は八であるが、それらは、

例13 後法性寺入道前関白家歌合に、もみぢをよみ侍ける　（三四四）

例14 後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍けるに、たびのこゝろをよみてつかはしける　（五二一）

例15 後法性寺入道前関白舎利講のついで、ひと十如是歌よませ侍けるに、如是躰の心を　（六一九）

のように、「後法性寺入道前関白」という形で使用されている。後法性寺入道前関白は、周知のように藤原兼実のことであるが、この人物は、撰者定家の庇護者である藤原良経の父に当たる人物である。このような人物呼称の統一が、結果的に「ごほふしやうじ」という語の頻用となったのであろう。

なお、この藤原兼実に関して「新古今詞書」では、

例16 入道前関白太政大臣、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りけるに、立春のこゝろを　（五）

例17 入道前関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りける郭公歌　（二〇一）

のように、「入道前関白（太政大臣）」で人物呼称を統一している。

次に、「ごきやうごく」という用例についてふれる。

「新勅撰詞書」における「ごきやうごく」の使用度数は一三であるが、それらは、

例18 後京極摂政、左大将に侍ける時、百首歌よませ侍けるに　（一七）

例19 後京極摂政家に百首歌よませ侍ける恋歌　（七七一）

例20 後京極摂政の家の歌合に、暁霞をよみ侍ける　（四七）

例21 後京極摂政家百首歌よみ侍けるに　（八三〇）

のように、「後京極摂政」という形で使用されている。後京極摂政は、藤原良経のことであるが、この人物は、上述したように撰者定家の庇護者である。「新勅撰和歌集」に三六首入集していることからしても、定家は良経を重要視していることがわかるが、このような良経重視の姿勢が人物呼称としての「後京極摂政」という形式への統一、そして多用につながり、結果的に「ごきやうごく」の頻用となったのであろう。

次に、「にほんしんわう」という用例についてふれる。

「新勅撰詞書」には、

例22 入道二品親王家に五十首歌よみ侍けるに、山家月　（二六六）

例23 入道二品親王家にて、秋月歌よみ侍けるに　（二九三）

例24 入道二品親王家に五十首歌よみ侍けるに、寄煙恋　（七六一）

のような「にほんしんわう」の用例が、計五例存している。これらの使用例からして、人物呼称としての「にほんしんわう」の使用に関しては、形式的に一応の統一がなされていることがわかる。しかし、前掲した例24と同一歌題にもかかわらず、

例25 入道二品親王家五十首、寄煙恋　（七六一）

のような使用例も存することからすると、「詞書」としての統一は必ずしも十分とは言えない。なお、「にほんしんわう」は、道助法親王であり、その主催した「建保六年道助法親王家五十首」からは一三首入集、道助自身も一一首採られており[13]、定家にとって重視した対象であったと思われるが、そのことが結果的に、人物呼称としての「にほんしんわう」の使用につながったのであろう。

以上、「新勅撰詞書」に使用された漢語語彙のうち、「千載詞書」「新古今詞書」では使用されていないいくつかの語について、その使用実態をみてきた。その結果、「新勅撰詞書」における「きうあん」「ごほふしやうじ」「ごきやうごく」「にほんしんわう」の頻用は、特定の人物の重視や、形式的な統一を計ろうとする定家の撰集姿勢によるものであることがわかった。

ところで、「新勅撰和歌集」の撰者定家の「詞書」に対する姿勢について諸先学はどのように見ておられるのであろうか。たとえば、樋口芳麻呂氏は、歌合を出典とする歌に関する詞書の不備・誤りを具体的に指摘されている[14]。また、山下三十鈴氏は、樋口氏の説を踏まえ、撰集がかなり杜撰なものであるとされつつも、私歌集の詞書との比較を通して、

何時、誰がという詠作年代、固有名詞を明示しようとする態度であり、出典とされた資料をもとに一首一首丹念に考証されていることがわかる[15]

と結論づけられている。また、生澤喜美恵氏も、

新勅撰集の撰集において、定家は、撰集資料の選び方、作者名の選び方、また、詞書の文体に非常に、自己の決めた原則に忠実であると考えられる[16]

と評価されている。

定家が記載した「詞書」に対する諸先学の評価は、上掲したいくつかの論考からでも、微妙に相違していることがわかる。筆者は、その当否を論ずるものを持たないが、しかし、ここでふれた諸語は、形式の統一という点においての諸先学の論の一端を跡づけるものともなっていると言えそうである[17]。

四―1

次に、「新勅撰詞書」における基幹語彙についてふれる。

どのようなものを、ある作品の基幹語とするかについては、基幹語という用語の定義とともに慎重な検討を要するが、ここでは、おおむね延べ語数の一パーミル（度数五）以上の使用度数を持つ語をもって、基幹語とする。

右のような語を基幹語とすると、「新勅撰詞書」の語彙における基幹語彙は、異なり語数で一五七語、延べ語数で三七四六語となる。この延べ語数三七四六語は、「新勅撰詞書」の全延べ語数五〇六二語の七四・〇パーセントとなるが、この数値は、かつて調査した同様な数値とほぼ同様なものであり[18]、その点からも、この一五七語を基幹語彙とすることに、ある程度の妥当性は存すると考える。

2

次に、1で述べた「新勅撰詞書」の基幹語彙と、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）[19]との比較を通して「新勅撰詞書」の語彙の性格の一端をみることにする。

表（5）

	共通語	平安時代和文脈系文学の語彙における段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
2	2	0	0	1	0	0	1	0	0	1
3	3	0	1	0	1	0	1	0	0	1
4	5	0	1	0	1	1	0	1	1	1
5	16	2	1	1	0	6	2	2	2	2
6	20	1	1	2	7	5	1	2	1	13
7	39	2	3	1	4	8	8	9	4	12
8	22	0	2	1	1	3	6	5	4	19
計	108	5	9	6	14	24	19	19	12	49

表（5）は、「新勅撰詞書」の語彙および「平安時代和文脈系文学」（以下、「平安和文」と略称する）の語彙を、それぞれ累積使用率によって一〇段階に分け、「新勅撰詞書」の基幹語彙および「平安和文基本語彙」に関する部分のみ抜き出し、前者を基準として、各段階における所属語数を示したものである。この表（5）から、「新勅撰詞書」における特徴的使用語を指摘するには、様々な方法が存すると思われる。また、その方法の適否についても、慎重な検討が必要であろうが、ここでは、同様な調査を行った拙稿と比較する都合上、一応、上、下各二段階以上の差が存するものをもって特徴的な使用語とする。

「新勅撰詞書」の基幹語彙における特徴的使用語を、右のように規定すると、それは、①段階一語、②段階一語、③段階一語、④段階三語、⑤段階八語、⑥段階一二語、⑦段階一八語、⑧段階一三語の、計五七語となる。以下、具体的にそれらを示すと、

I　「新勅撰詞書」の語彙における所属段階の方が上位の語

よむ（詠）・うた（歌）・いへ（家）・こひ（恋）・つかはす（遣）・かへし（返）・にふだう（入道）・びやうぶ（屏風）・まかる（罷）・あした（朝）

II　「平安和文」の語彙における所属段階の方が上位の語

いふ（言）・す（為）・みる（見）・はべり（侍）・ひと（人）・うへ（上）・なか（中・仲）・ひ（日）・みや（宮）・おなじ（同）・ところ（所）・まうす（申）・こと（事）・ひとびと（人人）・み（身）・よ（夜）・とし（年）・にようばう（女房）・まへ（前）・いづ（出）・まゐる（参）・もの（物・者）・うち（内・内裏）・しのぶ（忍）・ちゆうじやう（中将）・なし（無）・なる（成）・みこ（親王）・よ（世）・かく（書）・あまた（数多）・あり（有）・たつ（立、四段）・ゐん（院）・あめ（雨）・おもひいづ（思出）・かへる（帰）・かみ（上・守）・せ

うしやう（少将）・ちゆうなごん（中納言）・ふる（降）・ほど（程）・よし（由）・おもふ（思）・かた（方）・きく（聞）・すむ（住）

のように、Ⅰに一〇語、Ⅱに四七語属することがわかる。

3

次に、「新勅撰詞書」の語彙における所属段階の方が上位の語について、より具体的にみることにする。

ここに属するのは、上掲した一〇語であるが、これらの語を、筆者がかつて調査した八代集での結果と比較すると、「つかはす」「まかる」が八作品の「詞書」と、「よむ」「うた」「いへ」が七作品の「詞書」と、「かへし」「あした」が六作品の「詞書」と、それぞれ共通している。これらの語が、多くの作品の「詞書」と共通しているのに対し、「にふだう」が「後拾遺詞書」「新古今詞書」の二作品と、「びやうぶ」が「拾遺詞書」と共通しているのは注目に値する。なお「こひ」については、「詞花和歌集」を例外として、「金葉和歌集」以降の「詞書」と共通していることから、「こひ」という概念が、主として中世以降に頻用されるものであることもわかる。以下、「にふだう」「びやうぶ」の順に、その使用実態をみることにする。

4

まず、「にふだう」についてふれる。

表（6）は、八代集および「新勅撰和歌集」の「詞書」における「にふだう」および「びやうぶ」の使用度数を示したものである。[20] この表（6）からすると、「にふだう」は「拾遺詞書」から使用され、「後拾遺詞書」を例外として、頻用されるのは「千載詞書」からであると言えそうである。また、「にふだう」の使用例をみると、その多くは人物呼称に使用されたものであることがわかる。たとえば、「新古今詞書」の場合は、

例26　入道前関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りける　郭公歌　（二〇一）

例27　入道前関白太政大臣、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りけるに、立春のこゝろを　（五）

のように、そのほとんどが兼実に関する「入道前関白」「入道前関白家」「入道前関白太政大臣」「入道前関白太政大臣家」「入道前関白太政大臣家歌合」という形で使用されたものである。このような点からすると、「新古今詞書」における「にふだう」の頻用は、撰歌資料に負っている、換言すれば、撰者の撰集方針の結果であると言えそうである。では、「新勅撰詞書」における「にふだう」の頻用はいかなる理由によるのであろうか。以下、具体的に用例をみると、

例28　入道二品親王家に五十首歌よみ侍けるに、

表（6）

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	新勅
にふだう	0	0	1	13	1	1	15	26	25
びやうぶ	9	1	132	33	2	7	4	33	25

山家月　（二六七）

例29　宇治入道前関白の家にて、七夕歌よみ侍ける　（二一五）

例30　後法性寺入道前関白舎利講のついで、ひと〳〵十如是歌よませ侍けるに、如是躰の心を　（六一九）

例31　法性寺入道前関白、中納言中将に侍ける時、山家早秋といへるこゝろよよませ侍けるに　（二〇四）

例32　法成寺入道前摂政家に、法華経廿八品歌よませ侍けるに、序品　（五八二）

のような使用例が存する。

例28の「入道二品親王」は、「道助」のことであるが、「入道二品親王家五十首」のような使用例も存する。また、例29の「宇治入道前関白」は、「頼通」のことで、「宇治入道前関白家歌合」のような使用例も、例30の「後法性寺入道前関白」は、「兼実」のことで、「後法性寺入道前関白家歌合」「後法性寺入道前関白家百首歌」「後法性寺入道前関白百首歌」のような使用例も、例31の「法性寺入道前関白」は「忠通」のことで、「法性寺入道前関白家」「法性寺入道前関白家歌合」のような使用例も、例32の「法成寺入道前摂政」は、「道長」のことで、「法成寺入道前摂政家歌合」のような使用例も、それぞれ存する。

以上みたように、「新勅撰詞書」における「にふだう」の例も、その多くは人物呼称に使用されているが、「新古今詞書」のように「兼実」に集中することはない。

「新勅撰和歌集」の撰歌に関して山下三十鈴氏は、撰者の好尚に合った自由な選択がなされたというよりは、むしろ体制の面が強調され、当代以外の各時代の作品には平等に対処し、一時代の歌で終るのではなく客観的な立場から和歌の歴史的展開を示そうと意図されたのではないかと思うのである[21]と言われているが、このような定家の撰集方針の結果、「新古今詞書」と比較した場合、必然的に人物呼称において「にふだう」とする人物が多彩になったと思われる。また、その結果として「新勅撰詞書」において「にふだう」が頻用されることになったのであろう。

5

次に、「びやうぶ」についてふれたい。

「新勅撰詞書」における「びやうぶ」の使用度数は、表（6）に示したように二五である。以下、いくつか具体的にあげると、

例33　延喜七年三月、内の御屏風に、元日ゆきふれる日　（三）

例34　寛喜元年十一月女御入内屏風、江山人家柳をよみ侍ける　（二八）

例35　寛喜元年女御入内屏風、杜辺山井流水ある所　（一八八）

例36　三条右大臣家屏風に　（八）

例37　泥絵屏風、石清水臨時祭　（四八二）

例38　文治六年女御入内屏風に　（六八）

のような用例が存する。これらの用例からわかるように、「新勅撰詞書」における「びやうぶ」の頻用は、他の「詞書」の場合と同様、撰

歌資料としての屏風歌の重視の結果であるということになろう。

ところで、「新勅撰詞書」において「びやうぶ」が使用された「詞書」をみていると、ある特徴に気づかされる。それは、例34や例35にあげた「寛喜元年入内屏風」歌に関して、屏風歌であることの明示とともに、多くの場合、歌題（もしくは、それに類するもの）も示されているということである。この点、例38にあげた「文治六年女御入内屏風」歌の場合と比較すると、その差は歴然としている。[22] では、なぜこのような差が存するのであろうか。比較の必要上、「新古今詞書」における「びやうぶ」の使用状況をみると、屏風歌に関係がない一例を除く三二例中一九例が、屏風歌の明示のみの「詞書」中での使用であることがわかる。また、「文治六年女御入内屏風」歌とする「詞書」で使用された六例中、歌題をも示すのは二例であることもわかる。このような点からすると、「新勅撰和歌集」の撰集に当たって撰者定家は、自己の主家に当たる関白藤原道家の長女蹲子の入内に関する「寛喜元年（一一月）女御入内屏風歌」を撰歌資料として重視し、[23] それからの入集歌には、他の場合以上に「詞書」にも注意を払ったと思われる。その結果として、他の屏風歌の場合よりも歌題を記載する「詞書」が増加したのであろう。

五―1

次に、「新勅撰詞書」の基幹語彙のうち、「千載詞書」「新古今詞書」の基幹語とはならないものについてふれることにする。

「新勅撰詞書」の基幹語彙のうち、「千載詞書」「新古今詞書」で基幹語とはならないものは、それぞれ、五六語、四九語存する。これらのうち共通するものを除くと、結局、「新勅撰詞書」の基幹語彙のうち、他の二作品において基幹語とはならないものは三七語であることがわかる。以下、これらのうち、問題になりそうな二、三の語について、その使用実態をみることにする。

表（7）

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	新勅
だいり	0	0	8	24	7	12	6	5	20
う ち	4	12(4)	13(9)	22(14)	4(2)	2	16	7(5)	9(6)

2

まず、「だいり」についてふれることにする。

この「だいり」という語を検討するに当たっては、類似した意味を持つ「うち」の例と対照させて考えたい。

表（7）は、八代集および「新勅撰和歌集」の「詞書」における「だいり」[24] および「うち」の使用度数である。また（ ）内の数値は、「うち」の用例中、「だいり」と意味的に重なり（内裏・宮中、天皇の意）が存すると思われる用例数である。この表（7）からは、

1　「だいり」の意味を含む「うち」の用例は、「後撰詞書」から出現する[25]

2　「後拾遺詞書」「金葉詞書」「詞花詞書」「千載

詞書」で「だいり」が、「だいり」の意味を含む「うち」よりも多用されている

3　「新勅撰和歌集」の成立に近い「新古今詞書」においては「だいり」と、その意味を含む「うち」の使用度数が同じであるが、「新勅撰詞書」においては「だいり」の方が優勢である

のような点がみてとれるであろう。

以下、「新勅撰詞書」における「だいり」の使用実態をみることにする。

「新勅撰詞書」における「だいり」は、

例39　建保六年内裏歌合、秋歌　（三〇六）

例40　康保三年内裏菊合に　（三一三）

例41　建暦二年内裏詩歌合、羇中眺望といへるこゝろをよみ侍ける　（五三三）

のように「年号名＋内裏歌合」という形式中[26]のものがほとんどで、それ以外のものは、

例42　建暦二年春、内裏に詩歌をあはせられ侍けるに、山居春曙といへるこゝろをよみ侍ける　（九三）

の一例にすぎない。ただし、この例も、例41と同じ「内裏詩歌合」に関する「詞書」中での用例であることにも注意が必要であろう。

では、他の「詞書」において、「だいり」はどのように使用されているのであろうか。以下、それをみると、「拾遺詞書」においては八例中三例が、「後拾遺詞書」においては二四例中二二例が、「金葉詞書」においては七例中五例が、「詞花詞書」においては一二例すべてが、「千載詞書」においては六例中四例が、「新古今詞書」においては五例中三例が、「年号名＋内裏歌合」という形式中[27]で使用されている。このことからすると、「新勅撰詞書」における「だいり」の使用は、和歌史的には、ごく普通の、類型的なものであると言えそうである。

「新勅撰詞書」における「だいり」という用例の使用が類型的なものであるとしても、「千載詞書」や「新古今詞書」と比較すると、その用例の多さは歴然としている。その頻用はいかなる理由によるのであろうか。もう一度「拾遺詞書」から「新古今詞書」までの「年号名＋内裏歌合」の用例をみると、「後拾遺詞書」以降の「詞書」におけるそれらの多くは、「後拾遺詞書」に示された「内裏歌合」と共通している[28]ことに気づかされる。「後拾遺和歌集」は、天皇新政の復活という時代背景のもとに成立したものであり、「内裏歌合」は、その復活という和歌史の流れの中で、撰歌資料としても重要な位置を占めている。その結果、「後拾遺詞書」において「だいり」が頻用されたと考えられる。それに対して、「金葉詞書」以下の「詞書」における「年号名＋内裏歌合」という形式中の「だいり」は、使用度数が減少している。また、撰歌資料としての「内裏歌合」も、その多くが「後拾遺詞書」の場合と共通しており、結果的にあまり重要視されていないようである。

「新勅撰詞書」には、上述したように、「新古今詞書」などと比較すると、「だいり」が頻用されている。この使用で特徴的なのは、例

39にあげたような「建保六年内裏歌合」という形式中で一三例使用されていることであろう。また、「だいり」は、「建保六年内裏歌合」以外の歌合の明示にも使用されているが、その使用された「内裏歌合」は、例40にあげた「康保三年内裏菊合」の用例を除き、順徳天皇の治世に開催されたもの[29]であることにも注意が必要であろう。承久の乱の関係者である順徳院の詠歌を勅撰集の入集歌とすること、それをたとえ撰者が願っても、政治的な状況が許さなかったのであろう。だからこそ定家は、撰歌資料として順徳天皇治世の「内裏歌合」を重視したのではなかろうか。そして、その結果、「新勅撰詞書」で「だいり」が頻用されたのであろう。

3

次に、「めいしよ（名所）」についてふれたい。

「めいしよ」は、八代集の「詞書」においては「新古今詞書」に、

例43　教長卿、名所歌よませ侍りけるに　（一六〇七）

という用例が存するのみである。一方、「新勅撰詞書」においては、

例44　名所歌よみ侍けるに　（一二七一）

例45　名所歌たてまつりけるに、すゞか山　（一二八九）

例46　名所百首歌たてまつりける時よめる　（一二九七）

のような「名所（百首）歌」という形で用いられるほか、

例47　建保三年内大臣家百首歌よみ侍けるに、名所恋といへる心をよめる　（七四六）

例48　前関白家歌合に、名所月をよみ侍ける　（一二九二）

のような歌題中での使用例も存する。

「新勅撰詞書」には、上掲したような「めいしよ」の用例が、計一二例存するが、このような「めいしよ」の頻用は、平安中期以降の名所歌合の流行、それに続く名所題百首歌の出現など、時代の嗜好を踏まえた撰者定家の撰歌の結果とも言えるものであろう。

4

次に、「のがる（逃）」についてふれたい。

「のがる」は、「新勅撰詞書」に八例存している。一方、八代集においては、「千載詞書」「新古今詞書」に、各三例存しているものの、他の「詞書」には一例も存しない。この使用度数からして、「のがる」は、「新勅撰詞書」において頻用されていると言えそうである。

以下、具体的に「のがる」の使用実態についてみると、「千載詞書」の用例は、

例49　世を遁れて後、白河の花見て詠める　（一〇六二）

のようなもの、また、「新古今詞書」の用例は、

例50　世をのがれて後、百首歌よみ侍りけるに、花の歌とて　（一四六五）

のようなものであり、いずれも「出家する・隠遁する」意の「世をのがる」という形で使用されていることがわかる。また、「新勅撰詞書」における使用例をみると、そのほとんどが、

表（8）

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	新勅	続後
世をのがる	0	0	0	0	0	0	3	3	7	3
世をそむく	0	0	0	6	0	1	3	5	0	1
出　家　す	0	0	2	0	1	0	0	1	3	1

例51　世をのがれてのち、修行のついであさか山をこえ侍けるに、むかしのことおもひいで侍てよみ侍ける　（五三五）

のような「千載詞書」「新古今詞書」と同様な「世をのがる」という形での使用であり、

例52　しばし世をのがれて、大原山いゐむろのたになどにすみわたり侍けるころ、熊野御幸の御経供養の導師のがれたきもよおし侍て、みやこにいで侍けるに、…　（一一五一）

の例が唯一、それらとは相違したものである。

ところで、この「よをのがる」とほぼ同様な「出家する・隠遁する」意で用いられるものに、「よをそむく」という表現が存する。以下、比較のために八代集で使用された「世をそむく」表現についてもみることにする。

表（8）は、八代集および「続後撰和歌集」の「詞書」、「新勅撰詞書」において「出家する・隠遁する」意で使用された「世をのがる」「世をそむく」表現の使用度数をまとめたものである（なお、参考に「出家す」の使用度数も示した）。この表（8）からは、

1　三代集においては両表現とも使用されず、「後拾遺詞書」から、まず「世をそむく」表現が使用され、ついで、「千載詞書」から「世をのがる」表現が使用される

2　八代集においては「世をそむく」表現が優勢であるが、「新勅撰詞書」においては、もっぱら「世をのがる」表現が使用されている

のような点がみてとれる。また、次の「続後撰和歌集」の「詞書」においては、「世をのがる」表現優勢の傾向は変わらないものの、「世をそむく」表現も存しており、このことからしても「新勅撰詞書」の「世をのがる」表現は特異であると言えそうである。

「新勅撰詞書」における「出家する・隠遁する」意の「世をのがる」表現への傾斜が、結果的に「新勅撰詞書」における「のがる」の頻用につながったのであろうが、何故「世をそむく」表現を使用しなかったのかについては、必ずしも明確ではない。あるいは、「そむく」の持つ反社会的語感を撰者定家が嫌った結果かもしれないが、この点については今後とも考えたい。

5

次に、「おい（老）」についてみることにする。

「新勅撰詞書」には、「おい」の使用例が六例存するが、それらはすべて、

例53　おいのゝち、はるのはじめによみ侍ける　（四六三）

のように「おいののち」（年をとってから、年老いて後）という形で

の使用である。では、このような形式での使用が「詞書」における一般的な用法であったかどうか、以下、考えたい。

表（9）は、八代集および「続後撰和歌集」の「詞書」、「新勅撰詞書」における「おい」および「おゆ」の使用度数をまとめたものである。「おい」は、この表（9）でわかるように、「後撰詞書」および「新古今詞書」でも各一例使用されている。

「後撰詞書」での用例は、

例54　雪のあした、おいをなけきて　（四七二）

というものである。また、「新古今詞書」での用例は、

例55　おいののち、むかしをおもひいで侍りて　（一六七二）

というものである。

次に、「おゆ」の使用例についてみると、表（9）における使用度数には、「後撰詞書」における、

例56　年おいてのち、梅花うへて、あくるとしの春おもふ所ありて　（四七）

のような、「おいののち」とほぼ同意となる「おいてのち」表現中の用例のほか、「新古今詞書」における、

例57　としのくれに、身のおいぬる事をなげきてよみ侍りける　（七〇二）

のような、必ずしも同意とは言えない用例の度数も含んでいるが、大きな傾向はつかめると思う。なお、

表（9）

	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	新勅	続後
おい	0	1	0	0	0	0	0	1	6	5
おゆ	1	2(1)	2	2	2	0	1(1)	4(1)	0	0

表（9）の「おゆ」の使用度数の右の（　）内の数値が「おいてのち」表現に使用された「おゆ」の度数である。

この表（9）からは、「おいののち」表現は、「（とし）おいてのち」表現にとってかわるような形で「新古今詞書」あたりから使用されたことがみてとれる。[31] このような点からすれば、「おいののち」表現は、必ずしも定家特有の表現とは言えないものの、定家の好んだ表現、または、定家の時代に好まれた表現であったとは言えそうである。したがって、「おい」の使用は、結果的には撰者定家の好尚によるとも言えそうである。

六

以上、「新勅撰詞書」の自立語語彙に関して、「千載詞書」「新古今詞書」におけるそれらとの比較を中心にして、その使用実態の一端をみてきた。ここで、その要点を再掲することにより、本稿のまとめとしたい。

1　「新勅撰詞書」の自立語語彙における異なり語数・延べ語数は、それぞれ一〇五四語、五〇六二語となる。また、平均使用度数は四・八〇となる。

2　延べ語数の一パーミル以上の使用度数をもつ語を基幹語とすると、「新勅撰詞書」におけるそれは、異なり語数で一五七語、延べ語数で三七四六語となる。また、この三七四六語は、全延べ語数五〇六二語の七四・〇パーセントに当たる。

3 「新勅撰詞書」の語彙と「新古今詞書」のそれとの類似度D'は、「千載詞書」の語彙と「新古今詞書」のそれとの類似度D'にはおよばないものの、他の八代集の隣接する「詞書」間の類似度D'のどれよりも高いものとなっている。

4 品詞別構成比率に関してみると、「新勅撰詞書」における名詞の比率は、異なり語数・延べ語数のどちらにおいても、八代集の「詞書」におけるそれらよりも高率である。また、形容語の比率は、異なり語数・延べ語数のどちらにおいても、八代集の「詞書」におけるそれらよりも低率である。これらのことから考えると、「新勅撰詞書」は、「後撰詞書」とは対極に存する、「詞書」的性格の非常に強い「詞書」であると言えそうである。

5 「きうあん」「ごほふしやうじ」「きやうごく」などの頻用は、特定の人物の重視や、「詞書」の形式の統一を計ろうとする撰者定家の編纂・撰集方針の結果であると言える。

6 「びやうぶ」の頻用は、撰歌資料としての屏風歌重視の結果であろう。特に、定家の主家に当たる藤原道家の長女蹲子の入内に関する「寛喜元年（一一月）女御入内屏風歌」を重視し、その「詞書」には、他の屏風歌のそれよりも、より注意を払っていることがうかがわれる。

7 「だいり」の頻用は、順徳天皇治世における内裏歌合を、撰歌資料として重視した結果であると思われる。

8 「新勅撰詞書」における「のがる」は、そのほとんどが「出家する・隠遁する」意の「世をのがる」という形で使用されている。前後の「詞書」が、「世をのがる」とほぼ同様な意味を持つ「世をそむく」と併用するのに対し、「新勅撰詞書」は、「世をそむく」を使用していない点で特異であると言えそうである。これは、あるいは、撰者定家が「そむく」の持つ反社会的語感を嫌った結果かもしれない。

おおむね、以上のようにまとめることができるであろう。時間的制約からなし得なかった他の分析法によれば、「新勅撰詞書」の自立語語彙の別の特徴が見いだせるであろうが、この点に関しては、今後の課題としたい。

［注］

1 犬養廉氏他編『和歌大辞典』（昭和六一年三月、明治書院）の「新勅撰和歌集」の項（樋口芳麻呂氏担当）。

2 以下、『語い表』として比率等を示す場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版　古典対照語い表および使用法』（平成一年九月、笠間書院）による。

3 拙稿a「『古今和歌集』詞書の語彙について」（『湘南文学』一七号、昭和五八年三月）、拙稿b「『後撰和歌集』の『詞書』の語彙について」（『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一〇月、桜楓社）、拙稿c「『拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号、平成三年一月）、拙稿d「『後拾遺和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』

一二巻一号、平成七年一月）、拙稿e「『金葉和歌集』の『詞書』の語彙について」（小久保崇明氏編『国語国文学論考』平成一二年四月、笠間書院）、拙稿f「『詞花和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』一〇巻一号、平成五年一月）、拙稿g「『千載和歌集』の『詞書』の語彙について」（『城西大学女子短期大学部紀要』九巻一号、平成四年一月）、拙稿h「『新古今和歌集』の『詞書』の語彙について」（『湘南文学』一九号、昭和六〇年三月）。

以下、各和歌集の「詞書」については、それぞれ前掲拙稿による。ただし、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方等の変更による再調査の結果、その数値等に一部異同が存する。

4　たとえば、宮島達夫氏「語いの類似度」（『国語学』八二集、昭和四五年九月）や、（5）に示す水谷静夫氏のもの等が存する。

5　「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』『上海帰りのリル』及びその周辺」（『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月）、『数理言語学』（昭和五七年一月、培風館）、その他。

6　隣接する勅撰集の「詞書」間の類似度D'についてみると、「古今詞書」と「後撰詞書」とは〇・八一八、「後撰詞書」と「拾遺詞書」とは〇・七九七、「拾遺詞書」と「後拾遺詞書」とは〇・八一一、「後拾遺詞書」と「金葉詞書」とは〇・八二一、「金葉詞書」と「詞花詞書」とは〇・八〇三、「詞花詞書」と「千載詞書」とは〇・八二二、「千載詞書」と「新古今詞書」とは〇・八六一となる。また、これらの類似度D'の平均値は〇・八一九である。このような数値からすれば、「新古今詞書」と「新勅撰詞書」の類似度D'の〇・八五一という数値は、非常に高いものであると言える。

7　「新勅撰和歌集成立への道」（『新古今集とその時代』和歌文学論集8　平成三年五月、風間書房）。

8　（2）拙稿bおよびd。

9　各「詞書」における形容語（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）の異なり語数・延べ語数と、その比率をまとめたものが表（A）である。

表（A）

	異なり語数		延べ語数	
	度数	%	度数	%
古今詞書	59	6.7	211	5.4
後撰詞書	117	9.2	556	7.9
拾遺詞書	67	5.2	203	3.9
後拾遺詞書	126	8.0	529	5.9
金葉詞書	80	8.2	175	4.1
詞花詞書	57	7.9	130	4.9
千載詞書	76	6.1	239	3.4
新古今詞書	89	6.2	270	3.4
新勅撰詞書	49	4.7	107	2.1

10　山口仲美氏は、「平安仮名文における形容詞・形容動詞」（国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究　一』昭和五五年五月、和泉書院）において、平安仮名文学作品を文体的観点から、和文系言語と訓読系言語と口誦系言語の三つに分類し、

口誦系言語、すなわち、歌物語では、詠歌に至るまでの事情を要約的に述べるだけであるため、形容語は、余り必要なかったので

あろう

とされたが、「詞書」の語彙・文体を考える上で示唆に富む。なお、物語的性格の強い、散文的性格を持つ「詞書」の語彙における形容語の構成比率は高いという点については、（2）拙稿b・d・e等でふれた。

11　（1）書、「詞書」の項（桑原博史氏担当）。

12　本文の引用は、「新勅撰詞書」は前掲書、「後撰詞書」は大阪女子大学国文学研究室編『後撰和歌集総索引』（昭和四〇年一二月、大阪女子大学。底本は、高松宮家蔵天福二年本）の本文編、「千載詞書」は久保田淳・松野陽一氏校注『千載和歌集』（昭和四四年九月、笠間書院。底本は、静嘉堂文庫所蔵伝冷泉為秀筆本）、「新古今詞書」は久松潜一・山崎敏夫・後藤重郎氏校注『新古今和歌集』（日本古典文学大系28　昭和三三年二月、岩波書店。底本は、小宮堅次郎氏蔵本）に、それぞれよる。傍線筆者、引用の後の（　）内の数字は、引用本文の歌番号を示す。以下、同様。

13　久曽神昇・樋口芳麻呂氏校訂『新勅撰和歌集』（岩波文庫　昭和三六年四月、岩波書店）解題による。

14　「新勅撰和歌集と歌合―新勅撰和歌集出典考一―」（『国語国文学報』七集、昭和三三年二月）。

15　「新勅撰和歌集の構成」（小沢正夫・島津忠夫氏編『古今新古今とその周辺』昭和四七年七月、大学堂書店）。

16　「新勅撰集の編集―資料本文改変と配列―」（『国語と国文学』六六巻六号、平成一年六月）。

17　生澤氏は、注16論文において、良経歌に関して、「新勅撰和歌集」における「詞書」と、「秋篠月清集」における「詞書」を比較し、歌合歌の場合は歌題をそのまま詞書にはできないが、同じ歌合歌、百首歌であるのに様々な詞書が付されている点に注目したいとされている。本稿では、「詞書」における良経の呼称が統一されている点を指摘したものであり、生澤氏の結論との矛盾は存しない。

18　八代集の「詞書」における数値では、最高が「古今詞書」の七六・三一パーセント、最低が「拾遺詞書」の六七・一〇パーセントであり、平均は七一・九二パーセントとなる。

19　「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』八七集、昭和四六年一二月）

20　他に「にふだうだいじん」「にふだうしきぶきやう」「にふだうしんわう」「にふだうせつしやう」「にふだうだいじやうだいじん」「にふだうだいなごん」のような用例も、「拾遺詞書」に四例、「後拾遺詞書」に八例、「詞花詞書」に二例、「千載詞書」に三例、「新古今詞書」に二例、「新勅撰詞書」に二例、それぞれ存する。

21　（15）論文。

22　「寛喜」の場合は、一一例中歌題が存しないもの二例、「文治」の場合は、五例中歌題が存しないもの四例、上掲以外の屏風歌の場合は、九例中歌題が存しないもの五例。なお、「寛喜」「文治」に関しては、あくまでもそれぞれの屏風歌であると明示した「詞書」に関してのみ考察の対象とした。

23　（13）解題では、二四首入集とする。

24　漢字表記の「内裏」という用例は、「うち」とは読まず、「だいり」と読んだ。

25　「古今詞書」には、「宮のうち」という使用例（九六二）が一例存す

る。

26　「年号名＋内裏菊合」「年号名＋内裏詩歌合」という形式中の用例も存するが、すべて「年号名＋内裏歌合」で代表させた。

27　「年号名＋内裏」と「歌合」との間に「の」や「後番（の）」のようなものが挿入されている例も存するが、すべて「年号名＋内裏歌合」で代表させた。

28　「後拾遺詞書」から「新古今詞書」までの「年号名＋内裏歌合」の使用度数をまとめると表（B）のようになる。この表（B）でわかるように、「金葉詞書」以降の「詞書」における用例の多くが「後拾遺詞書」の用例と一致している。なお、表（B）の「詞花詞書」における「承暦四年内裏歌合」は、「承暦二年内裏後番歌合」の誤り（松野陽一氏校注『詞花和歌集』昭和六三年九月、和泉書院。一九一番歌頭注）であるが、底本（陽明文庫本）のままとした。

表（B）

	後拾	金葉	詞花	千載	新古
天徳四年内裏歌合	2	0	3	0	0
寛和元年八月七日内裏歌合	1	0	0	0	0
寛和元年八月十日内裏歌合	2	0	0	0	0
寛和二年内裏歌合	0	0	6	0	0
永承四年内裏歌合	10	0	0	0	2
永承六年内裏歌合	1	0	0	1	0
承暦二年内裏歌合	5	5	1	2	1
承暦二年内裏後番歌合	1	0	1	1	0
承暦四年内裏歌合	0	0	1	0	0

29　「建保六年内裏歌合」以外には、「建暦二年内裏歌合」「建保二年内裏歌合」「建保三年内裏歌合」（以上、各一例）、「建保五年内裏歌合」（二例）の用例が存する。

30　「続後撰和歌集」の「詞書」における使用度数は、滝澤貞夫氏編『続後撰集総索引』（昭和五八年一一月、明治書院。底本は、宮内庁書陵部蔵「続後撰集」〈五〇二・四〇四〉）によって調査した。以下、同様。

31　「千載詞書」に存する、

例A　上の男共老後恋といへる心を仕りけるに、詠ませ給うける　（八六四）

における「老後恋」は、「おいてのちのこひ」と読んだが、これを「おいののちのこひ」と読めば、「おいののち」表現は、「千載詞書」から使用されたことになる。また、「新古今詞書」に存する、

例B　老後、つのくになる山でらにまかりこもれりけるに、…　（一六六八）

における「老後」は、「おいてのち」と読んだが、これも「おいののち」と読めば、「新古今詞書」における「おいののち」表現は二例ということになる。